

高校生の「構造方略を使用した説明文理解」は副教科の学業達成をも規定するか？ —学習支援の場としての宗教科の可能性—

○山本博樹(立命館大学)

桑原昭信#(龍谷大学)

キーワード：副教科，構造方略，説明文理解

問題と目的

高校段階での「構造方略を使用した説明文理解」の不振が主教科の学業不振を招くことが示されてきた(山本・織田, 2020)。しかし，高校の授業は副教科からも構成されている。実際，日本の高校の約4割は私立であり，その約半数を占める宗教系高校では教育基本法第15条に則って宗教科授業が実施されている。この授業は単純な形での「教科書重視」とは言い切れないため，異なる影響が予想される。そこで，本研究では宗教科でも上記の影響メカニズムが存在するかを構造方略が発達した高3を対象に検討した。

方法

実施日 2019年11月～12月。

参加者 3つの仏教系私立高校に通う3年生681人(男385人，女296人)。未記入と未回収を除いた624人分を有効データとした。

手続き 宗教科の授業で以下を実施した。

構造方略使用傾向 山本・織田(2020)と同様に，構造方略の使用傾向(7項目)を7段階で評定。

説明文理解過程 「絶対他力説」に関する説明文を読ませた後に，Mayer(2008)のSOIモデルより，選択，体制化，統合について7段階で評定させた。

説明文理解度 「どのように思想を形成していったのが理解できたか」(思想形成過程理解度)について7段階で評定させた。また，受用的理解(桑原・山本, 2020)の観点から，「自分のあり方や生き方を考えていく手がかりとして理解したか」，「理解した内容を自身の生活上の問題解決に活用するか」を同様に評定させた。

学業達成 宗教科の理解度を7段階で評定させた。また，5教科の理解度についても同様に評定させた(今回は宗教科に限って報告する)。

結果と考察

予備的分析

構造方略の使用傾向より下位群(410人)と上位群(214人)を構成。前提要因となる語彙発達，認知発達，知識発達の平均値についての t 検定では有意差が認められた($p < .01$)。

説明文理解過程に及ぼす影響

選択，体制化，統合について参加者ごとに平均値を求め，同様に t 検定を行ったところ，有意差

が認められ($p < .01$)，下位群<上位群となった。

説明文理解度に及ぼす影響

思想形成過程の理解度と受用的理解度について，どちらも同様の t 検定を行った。有意差が認められ($p < .01$)，どちらも下位群<上位群となった。

宗教科の学業達成に及ぼす影響

宗教科学業達成について同様の t 検定より，有意差が認められた($p < .01$)。主教科においても同様の結果が得られ，下位群<上位群となった。

宗教科学業達成にもたらす影響のメカニズム

Figure 1のモデルを構築し，AMOS 22.0を使用してパス解析を実施し，母数の推定には最尤法を用いた。適合度指標は， $\chi^2 = .44$ ， $df = 1$ ， $p = .505$ ， $GFI = 1.000$ ， $CFI = 1.000$ ， $RMSEA < .001$ であり，モデルは適合していると判断した。Figure 1より，高3段階では構造方略を使用した説明文理解過程が思想形成過程の理解度を高めて受用的理解を促し，その結果として宗教科の学業達成が高まるメカニズムが存在することが示された。

総括

高3の構造方略使用傾向が説明文理解を介して宗教科の学業達成を規定するメカニズムが明らかになった。宗教科授業では教科書や教材が長文の説明文から構成されるため，「構造方略を使用した説明文理解」の重要性が示された形となった。一方，主教科でみられた影響メカニズムとの同型性から，この宗教科授業を学習支援の場として活用し，「構造方略を使用した説明文理解」を支援することで主教科の学業達成を促す可能性が示された。

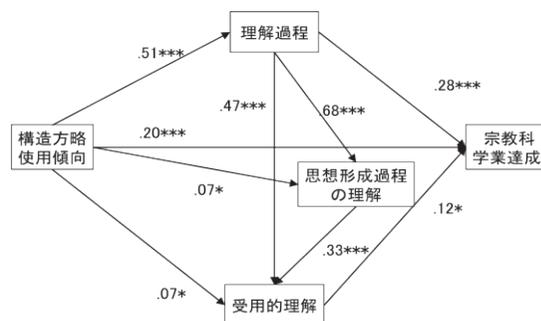


Figure 1 「構造方略を使用した説明文理解」がもたらす影響プロセス